

深山幽谷

私は作家内田康夫の小説が好きだ。

ある文庫本を読んでいたら深山幽谷なる四字熟語が出ている、その瞬間遠い幼き時代の一齣を思い出した。

夏の或る農閑期に父に苺取りに連れて行つてもらった、畑にある赤い苺でない、山で一・五m位の細い木に成る黄色の実である。

みずみずしくて柔らかく甘く美味しい、近くの山にはあまり無い、

何時間かかつたのだろうか少し高い山から、急勾配の崖を木に掴まりながら谷底に降りると、そこには清水がチヨロチヨロ流れていた、周りは鬱蒼と木が茂り、深山幽谷そのものである。

その川伝いに木苺がいっぱいになっている、半分は頬ばり残りは弁当箱に詰め家族のお土産である。

その深山幽谷は何処だったのか、最近まで分らなかった、記憶の底に沈み込んで、いつ分るか長い間の私の課題だった。

平成二年蔵王小村崎に転居し、部落の人々と付き合う様になり共同作業で兵糧館に草刈りに行く、車を下の平地に置き右側が急な崖になっている土手を登り草刈り場に行く。

途中の崖を見たとき、私の記憶が六〇何年かぶりに甦った、記憶の底にある風景そのものである。途中見せて貰った(ドソウ神)の小さな祠も部落の片隅にある。

甦った深山幽谷である。